

モノづくりインターンシップ体験記



キヤムブレン インターン生
横浜国立大学
工学部第二生産工学科
中山 貴博
(なかやま たかひろ)

職場の皆さんから「身内」扱いはされるのが嬉しかった。機械の稼働率を調べてグラフにして張り出したら「フーン、そうなんだ」と感心してくれて、感激でした。

キャンパスでは得られない人との交流

3次元CAMによる5軸加工で知られる株式会社キヤムブレンで、インターン一期生として働く2人の学生に体験談を聞いてみました。

キヤムブレン インターン生
東京電機大学
工学部機械工学科
大竹 和人
(おおたけ かずと)

社員の方にまじってCADの講習会に参加しました。それまでは自学自習で教本をにらみながらやっていたから、一気にCADの知識が深まりました。



——最後に、インターンシップの魅力とは？

大竹：インターンというのは実際の会社で職業体験するわけです。そこには専門性を持った人材が集まっているわけですね。学生が働くということ

づくりを進めています。社長からよく言われるのですが、「君は素人だ、素人のよさをうまく生かすのが大事だ」と。マニュアルは工場現場の材料の配置や、機械の基本的な取り扱いなどを説明するものですが、プロである社員の皆さんが気づかないような、本当に初歩的な知識なども盛り込んでいきたいと思っています。

——モノづくりの職場で働いて、モノづくりっていいなと実感したことはありますか。

大竹：いま、CADでインペラの設計をしています。実物の製作まで進めたいと思っています。社長にお願いして材料を揃えてもらい、機械を動かして、手に取るところまでやれば嬉しいうらなと、ワクワクしています。

中山：教科書のページを開きながら、「あ、これだ、これだ」と確かめることができるのは嬉しいですね。授業で聞いたことが工場での現実のものとして存在しているということ。モノづくりの現場ってほんとにスゴイって思いますね。

——これからの夢、キャリアプランを教えてください。

大竹：設計の分野で、ゆくゆくは毎日見えてきた工作機械の設計などにも関わってきたいです。

中山：僕は一度は大企業を経験して、その後中小企業に戻ってきたい。中小製造業を伸ばす役割を果たしたいですね。

ではアルバイトもありますが、インターンシップとは全然意味が違ってくる。大学で学ぶことも違う。

中山：社員さんとの交流も楽しいですよ。

大竹：そうそう。技術の先輩たちや経験豊富な経営者の方々と出会えることで、見聞が広がり、自分の将来を考える上での意見も聞ける。大学のキャンパスに閉じこもっていたら、とても会えないような人たちと会えますから。

受け入れ企業の視点

——インターンシップを考えたのは、どういう経緯からですか。

太田：ある大学教授からお声が掛かりまして、中小企業の経営者の立場から学生にカツを入れてくれというのです。日本の企業の70%は中小製造業が占めるのですが、そういう企業の経営者がどんなに頑張っているか、自分の哲学や信念を話してくれと。

株式会社キヤムブレン
代表取締役社長
太田 実
(おおた みのる)

インターンシップはまるで子育て。ここを巣立って、大手企業に就職してもいいじゃないか。両方を体験してまた戻って来れば良かったり叶ったりだな、くらいに考えています。

それがきっかけで僕はあらためて会社のあり方を考えてみた。これまで技術、技術で、一人で頑張ってきたが、その分、経営をおぼろげにしていたかなと。とくに「人なんて、放ついても育つだろう」と考えていたふしがある。それじゃ、いつまでも人が育たないことに気が付いたんですね。仕事をしながら、人を育てていかなければいけないと。じゃ、どうするかということでインターンシップの導入を思いついたわけです。

中山君は経営をやりたいというから、それじゃ、最短距離で経営を学ばせるからと。『社長室業務アシスタント』という名刺を持たせて、僕の傍にいつもいろと。大学を出たら、一度大手企業を経験して、ゆくゆくは企業の経営をやるようなイメージがあるようですね。

大竹君は大手の開発メーカーで仕事することを考えている。『設計課・研究生』の名刺で、機械の講習会とかも従業員と一緒に参加させました。その代わり、講習が終わったら、教わってきたことをほかの従業員に教えるんだと。社内も活性化されました。みんなの目色も変わりましたよ、負けちゃられないですから。



——まずインターンシップ(※)に参加したきっかけを教えてください。

大竹：僕は大学でアーチェリー部に所属しています。部長主務という役員として40人の部員をまとめて組織を動かしていくうちに、経営というものに興味を湧いてきました。自分の将来を考えても、経営がわかる技術者という方向があるんじゃないかと。中小企業へのインター

ンシップというサービスを知り、これだ！と思いました。

中山：僕は大学でベンチャー企業をテーマとする教授のアシスタントを務めていました。授業に招いた有名な経営者をアテンドしてお話をするうちに、企業経営って面白そうだなと思うようになりました。インターンシップという制度は教授から教わりましたが、その教授は、実はインターンシップ認定の担当だったんです(笑)。

——キヤムブレンではどのような仕事を担当しているのですか？

大竹：僕は経営と技術を同時に学びたいという欲張った希望を出したのですが、太田社長とお話して、CADを使

った設計の勉強をしながら、機会を見つけて経営も勉強していこうということになりました。「設計課・研究生」というのが僕の肩書きです。

経営のほうは社長を訪ねてくるお客さまとの席に呼んでもらって、そばで話を聞くという機会をつくっていただいています。最近では大学の先生や経産省の方にお目にかかりました。いま、大学と企業が連携する産学協同のような話が進んでいるものですから。

中山：僕は最初、キヤムブレンの強化合宿に飛び入りで参加しました。社員の皆さんが会社レベルで、個人レベルで今後の課題を洗い出して、何をやるかを決めていく。5カ年計画でその対策を考えていくというものでした。僕はその討議の進行役のような立場でしたが、もうパニックでした。その後、強化合宿のフォローのようなかたちで、進捗状況の中間時点のチェックをやるミーティングの進行もやりました。

現在は、新入社員向けのマニュアル

※インターンシップ
在学中の学生が企業で短期間の就業体験をすること。自分の専攻や将来のキャリアを考えるうえで貴重な体験となる。ここ数年、日本で急速に普及してきたが、欧米、とくにアメリカの大学では90%近くがインターンシップをカリキュラムに組み込んでいる。